

日本におけるアラブ・イスラーム世界研究
後藤 明（東京大学東洋文化研究所）

1) アラブ世界とイスラーム世界

イスラーム的な知識をイルムという。イルムを修めた人物がアーリムで、その複数形がウラマーである。ウラマー（イスラーム的知識人）のイルム（知識）は、コーランとハディースに基づいている。そして、コーランとハディースは、アラビア語で記されている。それゆえ、イスラーム的知識（イルム）の基礎はアラビア語ということになる。アラビア語が基盤となっている社会全体をアラブ世界とよぶなら、イスラーム世界は、そのどこにでもウラマーがいるのだから、それ全体がアラブ世界といえなくはない。しかし、一般的には、アラブ世界という言葉は、もっと狭い意味でつかわれている。

一口にアラビア語といっても、それには、正則語（フスハ）と各地の方言（あるいは日常の口語、アンミーヤ）がある。イスラーム的知識（イルム）の基礎は正則語（フスハ）であってアンミーヤではない。そして正則語は、かなりの努力をしなければ習得できない言語なのである。それは、誰にとっても、生まれながらにおのずと修得できる母語なのではない。一般に、アラビア語を母語とする人々をアラブ人というが、アラブ人の母語であるアラビア語は、正則語ではなく、各地のアンミーヤなのである。そして、その意味でのアラブ人は、イスラーム世界の構成員の一部でしかない。現在、世界全体のムスリム（イスラーム教徒）は十数億人いると推定されるが、アラブ人はそのうちのおよそ二億人で、ムスリム全体の20%程度である。もし、アラビア語を母語とするアラブ人の世界をアラブ世界というなら、それは、イスラーム世界の一部ということになる。イスラーム世界は、トルコ人の世界、イラン人の世界、ウルドゥー語使用者の世界（パキスタン）、ベンガル語使用者の世界（バングラデシュ）、マレー系言語使用者世界（インドネシア）など、多様な世界を含んでいる。このような状況は、現在に限らず、歴史的にも見られた。我が国におけるイスラーム世界研究は、イスラーム的な知識（イルム）の研究よりも、また、アラブ人の世界という意味でのアラブ世界研究よりも、多様な世界を含むイスラーム世界研究が先行していた。

2) 明治以前の日本とイスラーム世界

日本は古くから東シナ海を通して中国とつきあってきた。その中国には、ムスリム商人が来航していた。平安時代の末期や鎌倉時代（11世紀～14世紀）、中国で、日本の商人や仏教の僧は、中国でムスリムとのつきあいがあった。日本人は、ムスリム商人から、ペルシア語の詩などを書いてもらって日本に持ち帰っていた。時代が下って16世紀になると、東シナ海、南シナ海、ベンガル湾、インド洋で、海上交易が大いに栄えた。その海上貿易を担ったのは、日本、琉球、南中国などの商人と、ムスリム商人であった。ポルトガルなどのヨーロッパの商人も強引に、この海域での交易に参加していたが、その比重はきわめて小さかった。それに対して、南シナ海、ベンガル湾、インド洋では、ムスリム商人の比重が圧倒的に高かったのである。日本の商人は、ときに南シナ海まで出かけ、南中国の広東やタイのアユタヤなどで、ムスリム商

人に出会っていた。彼らは、ペルシア語を商業用語として使用するムスリム商人であった。日本とイスラーム世界の最初の出会いは、アラビア語を通さず、ペルシア語を通してであったようである。

17世紀になると、日本の政権をになった徳川幕府は、長崎で海外貿易を統制した。その長崎には、オランダ船などに乗って、タイのアユタヤなどからムスリム商人が来航していた。彼らもまた、ムガル朝下のインド人ムスリムで、ペルシア語を使用する商人であった。彼らとの取引のために、長崎にはペルシア語の通事（通訳官）がおかれていたのである。しかし、18世紀には、彼らムスリム商人の来航は途絶え、日本とイスラーム世界との直接交渉はなくなった。18世紀はしかし、長崎に来航した中国商人やオランダ商人を通じて、日本が海外事情を把握しようとしていた時代であった。西川如見や新井白石などは、世界の一部として、イラン、トルコ、そしてモロッコまでも含むアラブ世界にまで知見を広めていた。

3) 明治時代以降の日本とイスラーム世界

19世紀の中ごろ、日本が開国し、欧米諸国との直接交流をはじめると、それとともに、日本人の一部の間に、イスラーム世界への関心と知見が急速に広まった。当時、汽船で日本から西ヨーロッパ諸国に向かうためには、インドと中東を経由しなければならなかった。そのインドでは、ムスリム王朝であったムガル帝国が滅亡し、イギリスの支配が確立しようとしていた。寄港地の一つであったアラビアのアデンもまたイギリスの支配下におかれていた。スエズ運河を擁するエジプトは、19世紀中に、イギリスの間接支配下におかれつつあった。その中であって、ペルシア（イラン）とオスマン帝国（トルコ）が、独立を保っていた。

このような情勢下、日本がとりわけ関心を寄せたのがエジプトであった。一つには、欧米の勢力に脅威を感じていた当時の日本人が、イギリスに抵抗したオラービー・パシャの運動に共感を感じたからである。また一つは、欧米に押しつけられた不平等条約改定のために、エジプトの混合裁判所の制度を学ぶ必要を感じていたからでもあった。しかし、エジプトがイギリスの管理下におかれるようになると、エジプトへの関心は急速にしぼんでいった。一方、独立国であったペルシア（イラン）とトルコとは、正式な国交を開くべく努力がはじまった。しかし、両国との外交交渉は紆余曲折があり、国交が開かれるのは、結局、20世紀に入り、第一次世界大戦後のこととなった。

19世紀後半から20世紀初頭の時期に、イスラームに関する簡単な解説書や預言者ムハンマド伝が出版されることはあっても、それは欧米諸語からの翻訳でしかなかった。この時代の日本人は、アラビア語を学んで、イルム（イスラーム的知識）を研究する余裕はなかった。イスラーム世界を圧倒しつつあった欧米の知識を導入することで精一杯であったのである。

第一次世界大戦後、欧米諸国に対抗する姿勢を強めていった日本人は、アジアの諸勢力をまとめてその盟主となろうする野心を持ち始めた。その際「アジア」は、おおむね中国と朝鮮半島を意味していたが、欧米の植民地であった東南アジアやインドを視野に入れることもあった。さらに、誕生直後のソ連邦から亡命したムスリム勢力、イギリスと対抗していたアフガニスタン、独立を維持していたペルシア（イラン）とトルコなどにも興味を持ち始めた。そして、ペルシア語とトルコ語を修得し、それら

の言語で書かれた文献をつかって研究することもはじまった。しかし、アラビア語を修得しようとする研究者は、きわめて少数にとどまった。アラブ世界に独立国家がほとんどなかったからである。そしてまだ、イスラーム的知識（イルム）に関する関心が、ほとんどなかったからである。第二次世界大戦中、日本軍は、中国や東南アジアで、ムスリムを統治した。統治のために、イスラームを知るための努力はなされた。しかし、イスラーム的知識（イルム）を、アラビア語に基づいて研究するのは、まだ至難の業であった。欧米諸語とトルコ語の文献が翻訳されたにとどまった。

4) 第二次世界大戦後の日本のアラブ・イスラーム世界研究

第二次世界大戦で、アメリカ合衆国の圧倒的な軍事力に敗れた日本は、欧米の科学技術を吸収することに、最大限の努力を傾けた。一方で、欧米の植民地支配から脱して、アジア・アフリカ諸国が独立し、民族主義運動が盛んになると、日本人の一部は、アジア・アフリカ研究を再開した。その一環として、日本のイスラーム世界研究もまた再出発したのであった。戦後の、日本の大学などの研究機関は、科学技術を吸収するための工学部系の学部の拡充を優先しておこない、人文・社会系の研究はなおざれにしがちであった。恵まれない環境にあった人文・社会系の分野では、欧米研究が圧倒的な比重を占め、アジア・アフリカ研究の環境は整備されないままであった。そのなかで、少数ながら、アジア・アフリカの民族運動に啓発されながら、質の高い研究が始まっていったのである。

中東諸国がおおむね独立した1960年代には、アラビア語、ペルシア語、トルコ語など現地語の文献による研究が本格的に始まった。歴史研究と現代政治、そしてそれらの研究の基礎としての言語研究が中心であったが、イスラーム理解の鍵として、イスラーム的知識（イルム）をアラビア語の古典を利用して本格的に研究する研究者も出現していった。70年代のオイル・ショックを契機に、研究者の数も増え、研究は深化していった。さらに、80年代以降、日本が豊かになるとともに、中東諸国で学ぶ若い研究者が増えて、欧米の研究を追う時代を脱却して、日本独自の研究が成長していった。

イスラーム的知識（イルム）の研究や、中東地域の歴史や現代研究を核に、イスラーム世界研究の大型の共同研究が、繰り返し組織された。それは、それまでイスラームを外来の文化をして重視してこなかった東南アジア研究やアフリカ研究のなかに、イスラーム研究を深める役割を果たした。90年代の、ソ連邦の崩壊後の中央アジア研究もまた、イスラーム世界研究の仲間入りを果たした。さらに、欧米諸国や中国などのムスリムを研究対象とする研究者も、輩出していった。このような多彩の分野の研究者が依拠する言語は、アラビア語に限らず、多彩である。

我が国のイスラーム世界研究は、必ずしも、アラビア語が中心ではなく、またアラブ世界研究が中心でもない。現代のイスラーム世界の現実を反映して、多彩な言語による、広い視野の研究となっている。一方で、イスラーム文明の基礎はアラビア語にあることも、自明の前提になってきた。アラブ世界以外の、他のムスリム世界を研究するのにも、アラビア語の知識は必要である。そこに、アラビア語を中心とするイスラーム的知識（イルム）を修めたウラマーが存在し、彼らの社会的・政治的役割が大きいことが、もはや隠れもない事実として、研究者の間で認識されてきたからである。アラビア語の習得は、アラブ世界研究やアラブ世界理解のためだけではなく、イス

ラーム世界全体の研究や理解のために、必須のことになり始めている。

プロフィール 添付—2

1941年生まれ。東京大学東洋文化研究所教授。イスラーム世界の歴史を専攻。主要著書に、『メッカー—イスラームの都市社会』（中公新書）『イスラーム世界の歴史』（放送大学）など